

患者体験調査項目を用いた PRO 尺度構成に関する研究  
研究分担者 脇田 貴文 関西大学 社会学部 教授

研究要旨

2019年患者体験調査において、患者のPROを測定するLikertタイプの項目を用意していた。その項目から心理計量学の方法を用いてPRO尺度を構成し検討を行った。スコア分布からその個人差を測定できていると考えられた。

A. 研究目的

本研究は、2019年の患者体験調査において用意した患者の Patient Reported Outcom を測定する Likert タイプの項目を用いて、PRO 尺度を構成し、その信頼性と妥当性を検討することを目的とした。

Likert タイプの項目は、例えば「治療におけるあなた（患者さん）の希望は尊重された」という項目に対して「1.そう思わない」、「2.どちらともいえない」、「3.ややそう思う」、「4.ある程度そう思う」、「5.とてもそう思う」で回答を求めるものである。報告書等では、各回答選択肢の回答割合が報告されているが、これらの項目から PRO 尺度を構成し、回答者の潜在特性値（構成概念のレベル）を測定することができる。

このような尺度構成は心理計量学の手続きに基づき行われることが一般的であり、本研究では「患者のがん治療に対する満足度」を測定する PRO 尺度の構成を試みた。

B. 研究方法

2019年の患者体験調査のデータを用いた。その中から患者のがん治療に対する満足度を測定していると考えられる Likert タイプの 10 項目を選択した。これらの 10 項目すべてに回答が得られた 6333名のデータを用いた。

それらの項目に関して、因子分析を行い、Cronbach's  $\alpha$ による信頼性の推定を行った。妥当性検討として、診断時のステージ、がん種別等による比較検討を行った。ここでは、診断時のステージを報告する。

C. 研究結果

因子分析の結果、これらの 10 項目は 1 因子性を有していることが確認された。項目内容から、この因子はがん治療に対する満足度を測定していると解釈した。Cronbach's  $\alpha$ を求めたところ 0.93 という値が得られた。

スコアに関しては、 $M=3.91$ 、 $SD=0.82$ （レンジは 1-5 点）であり、若干ポジティブな評価に分布が偏っていた。診断時のステージに関しては、ステ

ージが低いほどこのスコアが低い傾向が示された。

D. 考察

本研究では、Likert タイプの項目を用いて PRO 尺度の構成を試みた。因子的妥当性、信頼性に関しては十分な結果が得られ、スコア分布に関しても十分個人差を測定できると考えられた。

E. 結論

この尺度が「患者のがん治療に対する満足度」を測定していると解釈して良いのか、また、妥当性に関しても様々な要因との関連を踏まえて精査する必要があり、今後更なる検討を進める。また、「満足度」以外の構成概念を測定する尺度を構成することもできるため臨床的な観点をもとに検討を行う。

G. 研究発表

1. 論文発表  
なし
2. 学会発表  
なし

H. 知的財産権の出願・登録状況

1. 特許取得  
なし
2. 実用新案登録  
なし
3. その他  
なし